



Title	第二部 部局史 . 地球環境科学研究科
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 1025-1035
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28189
Type	bulletin (article)
File Information	hokudai125yr_tsuusetsu_1025.pdf



[Instructions for use](#)

地球環境科学研究科

第一章 環境科学研究科の理念と沿革

第一節 環境科学研究科開設の理念

本研究科は、人間の創造する環境と自然との調和、人間社会と自然界との調和の仕組みの原理を研究すると共に、現に地球的規模で発生しつつある各種の環境問題の解決に寄与し、これを通じて全人類の福祉向上に貢献することを目的として設立されたものである。この目的を達成するために、既存の自然科学、社会科学、人文科学が相互に学際的協力を行うだけでなく、更にその垣根を超えた独創的な研究を蓄積することによって、新たな環境科学の成立を図ろうというのである。この意味で、北海道大学は、日本における先駆者として環境科学研究科の開設に重要な責任を負うものである。本研究科の大きな特色として、学際性、総合性、国際性の三者をあげたい。札幌農学校創設以来まさしく一〇一年目に本研究科の発足をみたことは、ここで研究するものにはたいし一層豊かなビジョンと雄大なアンビションとを与えるもので、研究科将来の飛躍的發展が大いに期待される。

第二節 沿革

一九七二（昭和四七）年十二月二十日に本学大学院委員会において、学長から新研究科構想に関する基本的な考え方が報告された。

一九七三（昭和四八）年二月十四日に「環境科学研究科（仮称）検討委員会」が設置され、委員会は各学部（教

養部を含む)及び研究所からそれぞれ一名合計一七名の委員により構成された。十月十七日に「環境科学研究所(仮称)検討委員会」の任務終了に伴い、評議会において「環境科学研究所(仮称)設立検討委員会」が設置された。

一九七四(昭和四九)年六月二十日に学位規則の一部を改正する省令(第二九号)が公布され学術博士の学位が設けられた(一九七五年四月一日施行)。九月十八日に「環境科学研究所(仮称)設立検討委員会」の任務終了に伴い、評議会において、「環境科学研究所設置準備委員会」が設置された。九月二十四日に北海道大学大学院環境科学研究科設置準備委員会要項が制定された。

一九七五(昭和五〇)年四月一日に本学大学院工学研究科に環境計画学専攻修士課程(学生定員一名)が設置された。四月十六日に国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令等の一部を改正する省令(第一六号)の施行により、本学大学院工学研究科に「地域計画学」講座が設置された。六月二十五日に本学大学院工学研究科規程の改正施行により、環境計画学専攻の授業科目が定められた(一九七五年四月一日適用)。環境計画学専攻の基礎となる講座は、「地域計画学」(基幹)、「建築構造学第一」(協力)、「建築計画学第一」(協力)、「土質工学」(協力)の四講座とされた。

一九七六(昭和五一)年四月一日に本学大学院理学研究科に環境構造学専攻修士課程(学生定員一名)が設置された。五月十日に国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令等の一部を改正する省令(第二四号)の施行により、本学大学院理学研究科に「環境基礎学」講座が設置された。五月十九日に本学大学院理学研究科規程の改正施行により、環境構造学専攻の授業科目が定められた(一九七六年四月一日適用)。環境構造学専攻の基礎となる講座は、「環境基礎学」(基幹)、「気象学」(協力)、「植物分類学」(協力)、「動物系統分類学」(協力)の四講座とされた。

一九七七(昭和五二)年二月十六日に北海道大学大学院環境科学研究所設置準備室要項が制定された。三月十日

に大学院環境科学研究科設置準備室が置かれ、設置準備事務が開始された。四月一日に国立大学の大学院に置く研究科の名称及び課程を定める政令の一部を改正する政令（第六三号）の施行により、本学に「大学院環境科学研究科」が設置され、社会環境学専攻修士課程（学生定員一名）及び環境保全学専攻修士課程（学生定員一名）に既設の環境計画学専攻修士課程及び環境構造学専攻修士課程を振り替えて四専攻で独立研究科として発足した。同日に初代研究科長に関清秀教授が併任された。本研究科環境計画学専攻に博士後期課程（学生定員五名）が設置された。四月十八日に国立学校設置法施行規則の一部を改正する省令（第一一号）の施行により、本学大学院環境科学研究科に事務部が設置された。国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令等の一部を改正する省令（第一四号）の施行により、本学大学院環境科学研究科に「環境基礎学」、「環境医学」、「生態系管理学」、「地域計画学」の四講座が設置され、これに伴い工学研究科の「地域計画学」及び理学研究科の「環境基礎学」の二講座が廃止された。なお、協力講座として、環境構造学専攻に「気象学」、「植物分類学」、「動物系統分類学」の三講座、社会環境学専攻に「衛生学」、「社会学」、「農政学」の三講座、環境保全学専攻に「物理学部門」及び「花卉・造園学」、「環境昆虫学」、「分析化学」の三講座、環境計画学専攻に「建築構造学第一」、「建築計画学第一」、「土質工学」の三講座が置かれた。四月二十八日に本研究科の発足にあたり研究棟が新営されるまで一時「古河記念講堂」を使用することとし、その改修工事が完成し事務部が事務局から移転した。四月三十日に第一回入学式が挙行された（修士課程二二名、博士後期課程二名入学）。五月九日に本研究科の講義が開始された。五月十八日に北海道大学大学院環境科学研究科規程が制定された（一九七七年四月一日適用）。

一九七八（昭和五三）年三月二十五日に本学院修士学位記授与式が行われ、全国初の学術修士学位記が本研究科環境構造学専攻及び環境計画学専攻の修了者一〇名に授与された。四月一日に本研究科環境構造学専攻に博士後期課程（学生定員五名）が設置された。

一九七九（昭和五四）年四月一日に研究科長に高桑栄松教授が併任された。四月二十五日に本研究科社会環境学専攻並びに環境保全学専攻に博士後期課程（学生定員五名）が設置された（一九七九年四月一日適用）。

一九八〇（昭和五五）年三月十日に本研究科管理・研究・実験棟（六八八平方メートル）の新築工事が落成した。四月一日に研究科長に明道博教授が併任された。

一九八一（昭和五六）年三月二十五日に本研究科初の博士後期課程修了者一名に学術博士の学位記が授与された。

一九八二（昭和五七）年四月一日に研究科長に太田實教授が併任された。

一九八四（昭和五九）年四月一日に研究科長に太田實教授が再任された。

一九八六（昭和六一）年四月一日に研究科長に伊藤浩司教授が併任された。北海道大学大学院環境科学研究科規程の一部改正により、環境保全学専攻「物理学部門」を「凍上学部門」に、環境計画学専攻「土質工学講座」を「都市環境工学講座」に変更した。

一九八八（昭和六三）年四月一日に研究科長に伊藤浩司教授が再任された。

一九九〇（平成二）年四月一日に研究科長に黒柳俊雄教授が併任された。

一九九一（平成三）年六月三日に学位規則の一部改正により博士及び修士の種類が廃止され、学位に適切な専攻分野の名称を付記することとなった。本研究科における学位の専攻分野の名称は「博士（環境科学）」及び「修士（環境科学）」となる（一九九一年七月一日適用）。

一九九二（平成四）年四月一日に研究科長に小島豊教授が併任された。

第二章 地球環境科学研究科の構想と沿革

第一節 地球環境科学研究科の構想

地球規模での環境問題は、人類の当面している最大の課題である。一九九二（平成四）年に開催された地球サミットで確認されたことは、性急に問題解決型のプロジェクトの立案や実施をせず、じっくり腰を落ち着けて基礎的、純学問的な研究・調査を積み重ねて解決して行くことである。

新しい学問体系としての地球環境科学の研究を行うとすれば、地球が、陸地（地圏）、海洋（水圏）、それらを取り巻く大気（気圏）とから構成され、その中で発生する自然現象の下に多くの生物が生息していることを理解しなければならぬ。さらに、物質の特性・作用・循環を正確に理解し、自然環境および生命活動に対し分子レベルからグローバルなレベルにわたって系統的な研究も行わなければならない。そこで、我々は地圏環境科学、生態環境科学、大気海洋圏環境科学、物質環境科学の四専攻を設置する必要があると考えた。

第二節 沿革

一九八九（平成元）年五月二十九日に本学に大学院を整備するための基本的理念及び全学的構想を策定するための「大学院整備構想検討委員会」が設置された。同日に大学院整備構想検討委員会に各学部（教養部を含む）及び研究所等から合計二名の委員構成による第二専門委員会が設置された。

一九九一（平成三）年七月二十四日に「環境科学に関する研究科構想特別委員会」が設置された。

一九九二（平成四）年九月十六日に「北海道大学大学院地球環境科学研究科設置準備委員会」が設置された。同日に北海道大学大学院地球環境科学研究科設置準備委員会要項が制定された。

一九九三（平成五）年四月一日に国立学校設置法施行令の一部を改正する政令（第五六号）の施行により、本学に「大学院地球環境科学研究科」が設置され、地圏環境科学専攻（修士課程一九名、博士後期課程一三名）、生態環境科学専攻（修士課程四三名、博士後期課程一九名）、物質環境科学専攻（修士課程一三名、博士後期課程一名）の三専攻で独立研究科として発足した。同日に初代研究科長に堀浩教授が併任された。同日に国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令（第一八号）の施行により、地圏環境科学専攻に「地球生態学講座」「地球環境変遷学講座」の二講座、生態環境科学専攻に「地域生態系学講座」「環境情報医学講座」「資源化学講座」「生態遺伝学講座」「環境分子生物学講座」の五講座、物質環境科学専攻に「分子機能化学講座」「物質機能化学講座」「生体機能化学講座」の三講座が設置された。なお、協力講座として、地圏環境科学専攻に「地球雪氷学講座」「雪氷物理学講座」の二講座、生態環境科学専攻に「染色体細胞学講座」「生物適応機構学講座」の二講座、物質環境科学専攻に「光分子化学講座」「反応制御化学講座」の二講座が置かれた。同日に北海道大学大学院地球環境科学研究科規程が制定された。四月十三日に本研究科初の修士課程及び博士後期課程の入学試験が実施された。四月二十日に本研究科の入学試験合格者が発表された（修士課程八四名、博士後期課程四二名合格）。四月三十日に本研究科の第一回入学式が挙行された（修士課程八四名、博士後期課程四一名入学）。五月六日に本研究科の講義が開始された。

一九九四（平成六）年四月一日に本研究科に大気海洋圏環境科学専攻（修士課程三一名）が設置された。同日に国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令の一部を改正する省令（第二二号）の施行により、大

気海洋圏環境科学専攻に「大循環力学講座」「化学物質循環講座」「気候モデリング講座」の三講座が設置された。なお、協力講座として、大気海洋圏環境科学専攻に「極域大気海洋学講座」が置かれた。

一九九五（平成七）年四月一日に二代目研究科長に戸倉清一教授が併任された。

一九九六（平成八）年四月一日に本研究科大気海洋圏環境科学専攻に博士後期課程（一三名）が設置された。十二月二日に本研究科新営研究棟（第一期）が竣工した。

一九九七（平成九）年四月一日に研究科長に戸倉清一教授が再任された。

一九九八（平成一〇）年四月一日に三代目研究科長に西則雄教授が併任された。

二〇〇〇（平成一二）年三月二十七日に本研究科新営研究棟（第二期）が竣工した。

二〇〇〇（平成一二）年四月一日に研究科長西則雄教授が再任された。

あとがき

環境科学研究科時代は、環境科学の学術博士取得のため世界各国より多数の留学生が入学し、現在、世界各国で活躍している。さらに地球環境科学研究科になり世界の大学・研究機関との交流が盛んとなり当研究科の国際的な役割は益々高まっている。

編集委員乗木新一郎は大気海洋圏環境科学専攻、井上勝一は生態環境科学・社会環境学専攻、鈴木稔は物質環境科学専攻、渡邊悌二は地圏環境科学・環境構造学専攻、工藤岳は環境保全学専攻の各専攻の資料収集・執筆を、編集委員長山村悦夫は環境計画学専攻の資料収集・執筆と総括を担当した。

年 表

環境科学研究科

一九七七(昭52)	本学に「大学院環境科学研究科」が設置され関清秀初代研究科長に併任	一九八一(昭56)	本研究科初の学術博士学位記が一名に授与
4・1	専攻主任門村浩(環境構造学) 齋藤和雄(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 太田實(環境計画学)	3・25	専攻主任門村浩(環境構造学) 齋藤和雄(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 太田實(環境計画学)
4・1	第一回入学式挙行	4・1	名譽教授(関清秀)
一九七八(昭53)	全国初の学術修士学位記が環境構造学専攻及び環境計画学専攻修了者一〇名に授与	一九八二(昭57)	太田實研究科長に併任
3・25	専攻主任門村浩(環境構造学) 齋藤和雄(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 太田實(環境計画学)	4・1	専攻主任門村浩(環境構造学) 齋藤和雄(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 山村悦夫(環境計画学)
4・1	高桑栄松研究科長に併任	一九八三(昭58)	専攻主任門村浩(環境構造学) 小島豊(社会環境学)
4・1	専攻主任門村浩(環境構造学) 齋藤和雄(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 関清秀(環境計画学)	4・1	伊藤浩司(環境保全学) 山村悦夫(環境計画学)
一九七九(昭54)	本研究科管理研究実験棟の新築工事落成	一九八四(昭59)	太田實研究科長に再任
3・10	明道博研究科長に併任	4・1	専攻主任門村浩(環境構造学) 小島豊(社会環境学)
4・1	専攻主任門村浩(環境構造学) 齋藤和雄(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 関清秀(環境計画学)	一九八五(昭60)	専攻主任門村浩(環境構造学) 小島豊(社会環境学)
4・1	専攻主任門村浩(環境構造学) 齋藤和雄(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 関清秀(環境計画学)	一九八六(昭61)	伊藤浩司研究科長に併任
		4・1	専攻主任菊池勝弘(環境構造学) 小島豊(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 山村悦夫(環境計画学)

一九八七(昭62)	4・1	専攻主任菊池勝弘(環境構造学) 小島豊(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 山村悦夫(環境計画学)
一九八八(昭63)	4・1	伊藤浩司研究科長に再任
	4・1	専攻主任小野有五(環境構造学) 小島豊(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 山村悦夫(環境計画学)
一九八九(昭64、平1)	4・1	専攻主任小野有五(環境構造学) 小島豊(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 山村悦夫(環境計画学)
一九九〇(平2)	4・1	黒柳俊雄研究科長に併任
	4・1	専攻主任小野有五(環境構造学) 小島豊(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 山村悦夫(環境計画学)
一九九二(平3)	4・1	専攻主任馬渡駿介(環境構造学) 小島豊(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 山村悦夫(環境計画学)
一九九二(平4)	4・1	小島豊研究科長に併任
	4・1	専攻主任馬渡駿介(環境構造学) 小島豊(社会環境学) 伊藤浩司(環境保全学) 山村悦夫(環境計画学)
地球環境科学研究科		
一九九三(平5)	4・1	本学に「大学院地球環境科学研究科」が設置され堀浩初代研究科長に併任
	4・1	専攻長小野有五(地圏) 戸倉清一(生態) 喜多英明(物質)
	4・30	第一回入学式挙行
	7・14	米国イリノイ大学大学院シカゴ校と部局間協定締結
	10・16	山村悦夫日本地域学会論文賞受賞
一九九四(平6)	4・1	大気海洋圏環境科学専攻設置
	4・1	専攻長前野紀一(地圏) 戸倉清一(生態) 市川和彦(物質)
	4・1	名誉教授(伊藤浩司)
	9・1	露崎史朗日本植物学会奨励賞受賞
	10・1	専攻長松野太郎(大気海洋)
一九九五(平7)	3・16	インドネシア共和国・パランカラヤ大学と部局間協定締結
	4・1	戸倉清一研究科長に併任
	4・1	専攻長大場忠道(地圏) 西則雄(生態) 高杉光雄(物質) 松野太郎(大気海洋)
	4・1	名誉教授(堀浩)
	4・1	名誉教授(喜多英明)
	5・30	戸倉清一高分子学会功績賞受賞
一九九六(平8)	2・2	吉田登北海道分析化学賞受賞
	2・9	英国ノッティンガム大学と部局間協定締結
	4・1	専攻長本堂武夫(地圏) 西則雄(生態) 平尾健一(物質) 角皆静男(大気海洋)

8・26	山村悦夫国際環境創造賞受賞(国際環境創造学会マ ドラス・インド)
11・7	謝尚平日本気象学会山本・正野賞受賞
12・2	新宮研究B棟が竣工
一九九七(平9)	
2・4	市川和彦溶融塩賞受賞
2・4	田中俊逸北海道分析化学賞受賞
3・28	工藤岳日本生態学会宮地賞受賞
3・31	奥原敏夫触媒調製化学賞受賞
4・1	戸倉清一研究科長に再任
4・1	専攻長平川一臣(地圏)西則雄(生態)中村博(物 質)角皆静男(大気海洋)
4・1	名誉教授(小島豊)
7・7	松野太郎日本学士院賞受賞
10・17	ネパール王国トリブバン大学科学技術研究科と部局 間協定締結
11・17	中国・蘭州大学資源環境学院と部局間協定締結
一九九八(平10)	
1・16	マレーシア国サバ大学科学技術研究科と部局間協定 締結
2・27	山村悦夫ゴールド・スター賞(国際業績評価センター、 ケンブリッジ・英国)
4・1	西則雄研究科長に併任
4・1	専攻長福田正己(地圏)木村正人(生態)長谷部清 (物質)角皆静男(大気海洋)
4・1	名誉教授(戸倉清一・松野太郎)
4・6	山中康裕日本海洋学会岡田賞
5・8	山村悦夫ミレニアム・ホール・オブ・フェイム賞受 賞(米国業績評価研究所、ローリー・米国)
一九九九(平11)	
2・3	中村博北海道分析化学賞受賞
4・1	専攻長南川雅男(地圏)木村正人(生態)奥原敏夫 (物質)乗木新一郎(大気海洋)
10・29	王律江助教逝去
二〇〇〇(平12)	
3・27	新宮研究C棟が竣工
4・1	山村悦夫国際功績賞受賞(国際業績評価センター、 ケンブリッジ・英国)
4・1	西則雄研究科長に再任
4・1	専攻長香内晃(地圏)東正剛(生態)市川和彦(物 質)乗木新一郎(大気海洋)
4・1	名誉教授(高杉光雄)

